

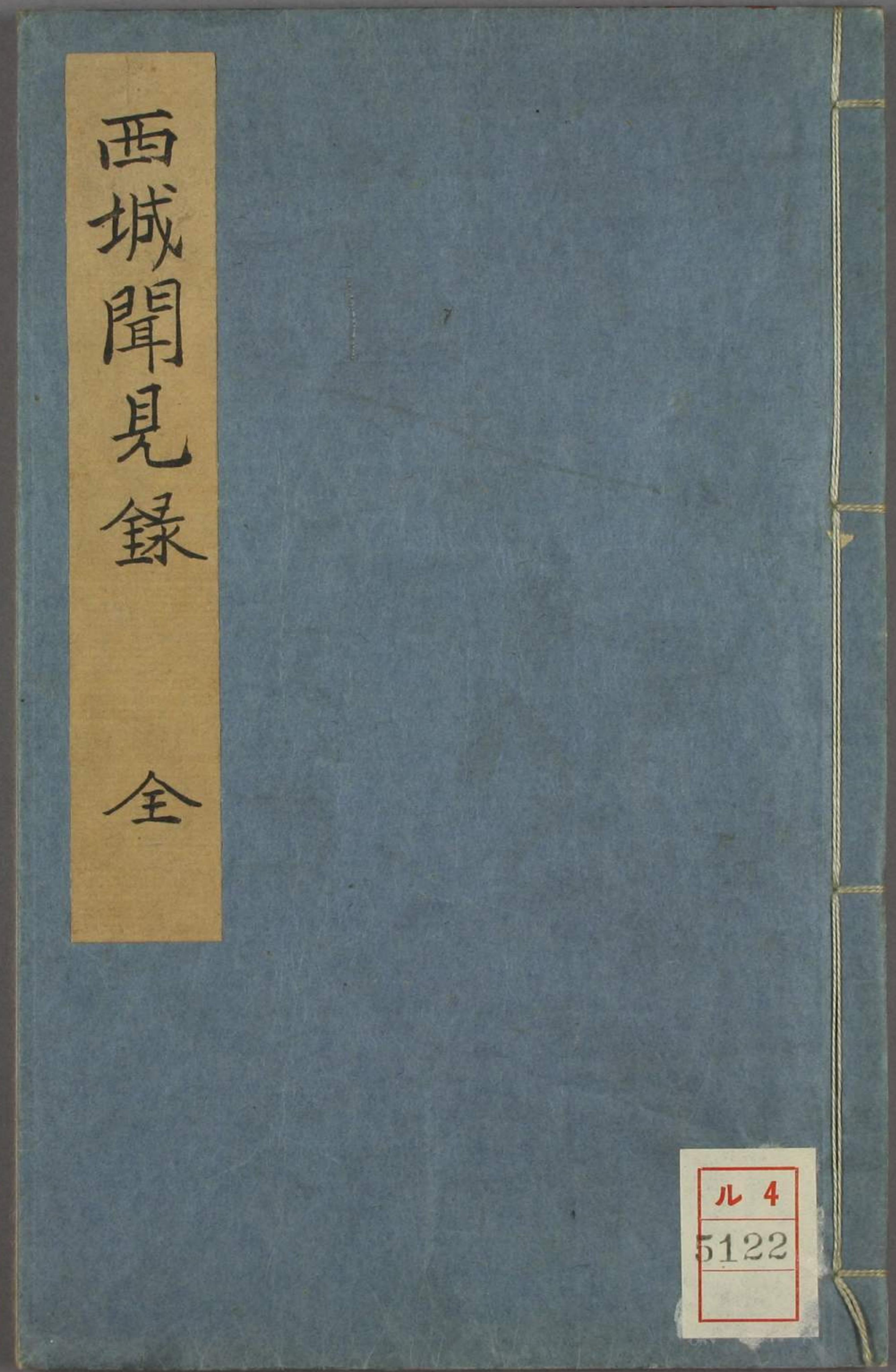
• 0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 1 2 3 4 5 6 7 8 9 20 1 2 3

JAPAN

Tama

西城聞見錄
全

ル 4
5122



ル
門號
5122
卷



序

秋の上風すゝきもあやかし
早ちる寒枕ふ三輪組反て見
古き史の中より一恵と探り
古ぬ閑き見えれ是の又に乃
始免浪革おほほ一圓と送り
仰時筆の間りゝゝ暮營の
事あると爲りあがむ古寺の碑

あと何うれやううしよをう
一と長き夜の燈うけつ
其ゑどもく國ゐのと補い
金城聞見録と題する

雨

文化十癸酉の初冬

三芳郷里赤間立の薦叟

環翠堂記



金城聞見録

田文樵述



桙櫓筋東咸郡大坂の山城也、首石山也、一向淨弓乃
林也かして、中綱有殿加人居所ドテ、勇力高なり。上、御蟹
と蟹、殿閣樓門日映し、浪華の郡民是を云ひて石山
印堂と号し、是じよ、殿壁人元佑の代、あ、蟹蟹云
計りたず、時尾陽の大守織田信長、地の要害とした
以使所望每度在れたる如上人故く、遁走不休て天正
丙子年夏四月、長国兵部左衛藤高荒木樓津守村宣
明智、向守光秀、宗田備中守高井順慶、將軍として
三方の兵を起し、大坂を攻め、時小門跡元佑不津難波

堅と接へる路と寒く是を待候。室町の老若淳
貴時と我らとて地かは事門と不切満。尼洋守
宗室と早御にて序かけたり。信長諸將と左
先在津難波の勢を攻撃。伴兵洋地と三保と備お主
の信長の先手の將。好美岸桜木寺の備後不得
進車。後津原田備中守と一木とあてを攻城兵又防砲
とひく栗田の兵と三保にオ入信之進不破栗田と沙小
打丸と遂路兵大敗。武尊と信長の送り主。天王寺
の岩に近入敵是と退て天王寺の壁を攻る。備中、筒井
順慶明智元秀。朝日同甚九郎楠子正則大喜傳而
おえと防や。大敵丘端五平。大將鈴木宣治真光
了進と攻め。急し其上俄小築。一岩かん。立籠

一ノ段落。高砂と云ふから信長こととすと大いに驚
昂進。糸井河井春長と在京しく之と聞。即時と立籠
敵兵堤せいく水。處。是と防堵。早進す。不破春長大怒
怒り先登して。もとほ。諸軍之小崩。ふく篇川と號
相争。諸將信長の弱君江の極まる。惟天正五年。春日
敵兵固を備て。朝と待信長作久の右衛門松木洋心園
吾部大丈。是吾の池田母邊守多羅尾常勝。左吉と光
陳。と。羽林。筑前守瀧川。た。近の監烽屋。兵庫。改。准
備。た。の福葉。平。織守氏家。在京伊賀。伊賀守。ふと。陳
と。信長親。と。左。陈。と。十五万の大軍。と。朝の
渭。かく。ゆ。い。大。小。拵。う。軍。と。兵。大。と。敵。を。大。攻。の。備。
了信光の。兵。勝。と。立。て。進。と。し。う。首。敵。級。と。博。急。が。後。

博多に迫り十室二十室、夜置宣夜。と力も攻めずて博多
をと怖々氣をかく防ぐは小計に其上無事の要害と
れ、攻めあ小利とあひ持続。 明に軍議の事す
信長也と官馬の底性をうかがふと計り伊豆國有馬尉同是
席。小天王寺の城とす。而近處山城守松永源氏奉して
湯守官守隊十ヶ所とす。而て肩七日信長尾羽、凱陣有り
被ひ大攻方から有る者と深く累と高めて防ぐ事
同じ天王寺の城より虚を窺ひ攻めず。かく之
も希と不情。門流の事と金鉄の事とす。若守中
攻め事不能。且自眼合へ年月と往まゆがりけり
敵敵風。 以初使信長也和と清セり。能加人じ
郡臣也仰。 わく和時と整と。室井紀元弘雅賀。君は

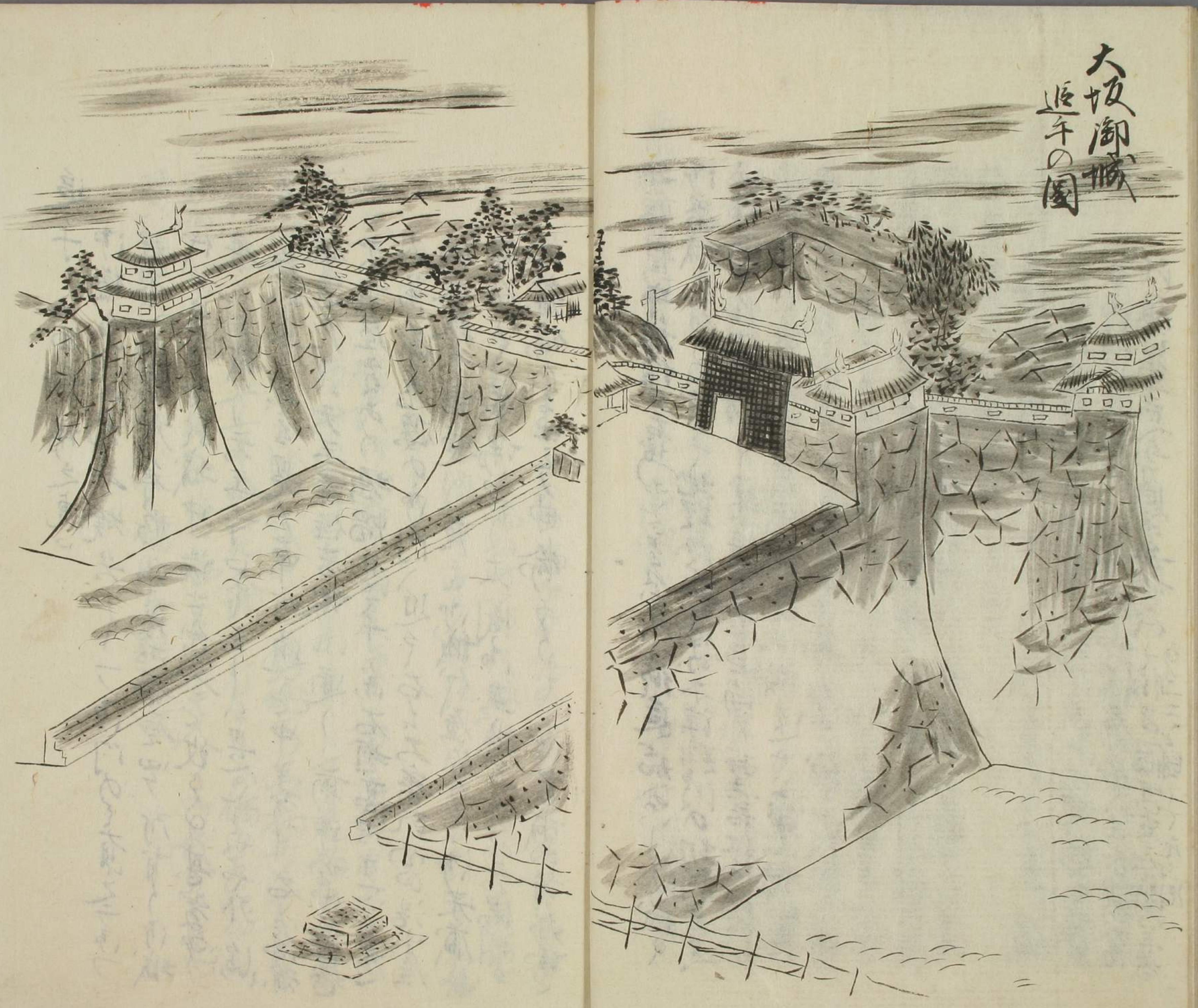
移して大坂の本陣に佐長、献忠信長夫部善七郎と大坂へ達し、蒙金
帛請あしを乞ひ及臣下、賄り加と替の駄とも大坂から臣下を送る
一方馬代重千萬緒至ると信長は送り和暦余月内に之より
天王寺の將軍として先將軍大坂と宇治でぬ天正元年六月
五年の間防城守同方よりも全く名体の徳ト云々是信長の名
聲とす。され端から同年明智光秀と爲り信長京都
本城守木戸山城死す。信秀羽柴秀吉を義兵と號し、備山
湯の一部をえどりと打取^{シテ}してよう暫く天下一を定め浪立凡
も有り。終りか、天正十二年の春より大坂の城と有事せりて
山門の地理と考自繩作し、新小塙と環^スお長と呼ぶ所清
の人部良工と摺つて夜えと營みたのみとす。又の金森
がさぬ向土殿下都城行り住む。すれど天下無事の

かはとおもひぬ其はす年と後く度もをばナ國歎下草花即有秀
相々として事と達し大海上奉るに極れかと生毛内度幸左衛
東照神君ナ故而國と云ひ國軍の諸軍わとて而圍み更夜
攻めより是急に詫く一方ゆけ和様有り三つの事あとはく見え
ノ大坂方之主皆の主同キえや元年再び日本の大辱と作
攻めより小城中もあちく朝一もる事ありハ後考の高
本村ノ東帝と慶喜が比して防キ初一とも百萬百奇説
にて背二日高仰体もアシテ此のうから來物もと始めてゆ生害
志と思ひ名を清の主或歎化又自利一一大筒居と定ぐ
行文錦度もとほくに四半三事基の性とて徳川櫻子
所至りニ而前ノ今、至る四半平意處うれど
東照宮の御神徳の事が御歴代として阿鄧備中守成、御成焉

安藤村鷹守補植手右衛門と云ふ者所に後造を加へ、代へ
伊勢城と、うりぬけにて地理缺れ、南木津御内山の切石を量
河口の通し道く東、住吉堺の西海、望若江の部野の
手端をは近く、西小寺高尾門の流路迄、山完山年
前をさう、軍の主は二名有馬より十二軒を食給すの諸
北小やう連郭れて田屏やく其中二家の大城、夷て市中の
民居、廻を連が軒を重へ整善立たり、鳥家謂曰南
但く北と神相應、無生の佛地と、是之金戒と云謂也、信其
功事有年もし核卒不能もじ下り

大政の改め西國早とる左行安の代をも其の生を安享すも尋常
手考に至る所加増りて下博高居に携らる計備中は數々方の御用
有て即ち代としてすとくわまぐらやいあはる度と居れ三事の加添大萬
以三組御番士百人与刀同様毎秋交代して御番の事務の事務
を司るを圖して在し也

大坂御城
延年の圖



追手 西向 暁之虎口

沖櫓多門お先身焼失（一）沖門のと有之三あつ
冠木之向番所年形外張お番屋四ヶ所有り江城
代々之を守る城中備士出入と改より恵安が
慶元の戒（ノ）天王寺口やか（ノ）豊ことかや外海
めく草原も是より車町通と中（ノ）弓（ノ）石と築
橋通たり（ノ）天王寺住吉櫻小通（ノ）前沖櫓や櫻
木の下屋（ノ）あり堀幅（ノ）千余石堀高サナセる左
内第御本丸櫻の御門（ノ）近（ノ）右（ノ）あ番院西の浩慶
御太鼓矢倉（ノ）運（ノ）たんか城代屋（ノ）ゆ示藏
並（ノ）いく廣場（ノ）太閤（ノ）五城の席（ノ）天守閣
高築櫓の邊（ノ）曲輪（ノ）と高城の前外壁

地（ノ）れしより今二の曲輪（ノ）奉れの（ノ）あせ（ノ）高而高築
櫓（ノ）手（ノ）れ（ノ）今（ノ）と櫻の町家（ノ）屋根櫓（ノ）アレ（ノ）京の形と
傳（ノ）有（ノ）人（ノ）は（ノ）落葉（ノ）中（ノ）道法（ノ）と能（ノ）割（ノ）也（ノ）
屋（ノ）あ（ノ）是（ノ）

毎年の秋太番（ノ）加番の諸侯并（ノ）番士御旗車出交代
有（ノ）其日（ノ）市中の老若男女郡集（ノ）て見物（ノ）と高築
先津城中（ノ）入（ノ）れ（ノ）或（ノ）御（ノ）鉄炮（ノ）長柄（ノ）矛（ノ）鎗
一行（ノ）連（ノ）丈古平（ノ）騎（ノ）完（ノ）城（ノ）も（ノ）お橋（ノ）た右（ノ）小（ノ）
鉄炮（ノ）切大鍋（ノ）と尾（ノ）も（ノ）写（ノ）每（ノ）足（ノ）輕（ノ）入（ノ）ソ（ノ）御（ノ）鐵（ノ）四（ノ）

御城中ヨリ
浪華ノ市中

一望ノ圖

六圍

沙原太橋

下馬の井



毎年二月始の午の日玉造松山稲荷^{アシハラ}神社の郡集
市をさう當日即ちすぐ大至前の高原へ物賣
小屋を造り^{アシハラ}蔥張の酒呑^{カク}有^{アリ}宿^{アサヒ}と云ふ^{アサヒ}、萬石
有^{アリ}老若^{アシハラ}吏^{アシハラ}貴賤^{アシハラ}袖^{アシハラ}とつる幕^{アシハラ}に廻
割^{アシハラ}詰^{アシハラ}（うふいも詰^{アシハラ}）^{アシハラ}殊^{アシハラ}樂^{アシハラ}と暮^{アシハラ}
ほくあはれ廣原^{アシハラ}（アシハラ）鑑^{アシハラ}と入^{アシハラ}のやどる^{アシハラ}是處
一^{アシハラ}車^{アシハラ}あけり^{アシハラ}亦^{アシハラ}二月七日の朝未明^{アシハラ}
其處^{アシハラ}入^{アシハラ}赤^{アシハラ}被^{アシハラ}ゆゑり^{アシハラ}轉^{アシハラ}ゆく^{アシハラ}子稚^{アシハラ}の
家^{アシハラ}と^{アシハラ}寧^{アシハラ}近^{アシハラ}あり^{アシハラ}渾^{アシハラ}る年中^{アシハラ}の百邪^{アシハラ}と拂
ヤム^{アシハラ}亦^{アシハラ}拂^{アシハラ}免^{アシハラ}ヤテ牛^{アシハラ}と其處^{アシハラ}小放^{アシハラ}す有^{アシハラ}清
城築^{アシハラ}の初牛^{アシハラ}の力^{アシハラ}大石大木^{アシハラ}と引^{アシハラ}切^{アシハラ}候
下馬^{アシハラ}の升^{アシハラ}常^{アシハラ}汲^{アシハラ}事^{アシハラ}と禁^{アシハラ}を名水^{アシハラ}

追^{アシハラ}ひ古橋^{アシハラ}の元^{アシハラ}あ^{アシハラ}石^{アシハラ}を^{アシハラ}き^{アシハラ}て^{アシハラ}よ^{アシハラ}り
宿^{アシハラ}より石^{アシハラ}を^{アシハラ}疊^{アシハラ}す^{アシハラ}（アシハラ）下馬れ^{アシハラ}（アシハラ）井戸下馬^{アシハラ}
標^{アシハラ}と^{アシハラ}も^{アシハラ}昔本願寺^{アシハラ}臺所^{アシハラ}の井^{アシハラ}（アシハラ）と^{アシハラ}お^{アシハラ}上^{アシハラ}登^{アシハラ}
有^{アシハラ}（アシハラ）迎^{アシハラ}（アシハラ）近居所^{アシハラ}達^{アシハラ}（アシハラ）と^{アシハラ}と^{アシハラ}

秀頬^{アシハラ}胞^{アシハラ}松^{アシハラ}

石^{アシハラ}の内^{アシハラ}佛^{アシハラ}私^{アシハラ}右^{アシハラ}連^{アシハラ}古^{アシハラ}通^{アシハラ}也^{アシハラ}金^{アシハラ}院^{アシハラ}
前^{アシハラ}（アシハラ）あ^{アシハラ}ゆ^{アシハラ}か^{アシハラ}と理^{アシハラ}（アシハラ）下^{アシハラ}（アシハラ）と^{アシハラ}便^{アシハラ}（アシハラ）て^{アシハラ}攝^{アシハラ}
這^{アシハラ}（アシハラ）古^{アシハラ}（アシハラ）本^{アシハラ}（アシハラ）安^{アシハラ}（アシハラ）産^{アシハラ}（アシハラ）の^{アシハラ}と^{アシハラ}人^{アシハラ}（アシハラ）^{アシハラ}葉^{アシハラ}（アシハラ）と^{アシハラ}て^{アシハラ}
有^{アシハラ}（アシハラ）（アシハラ）

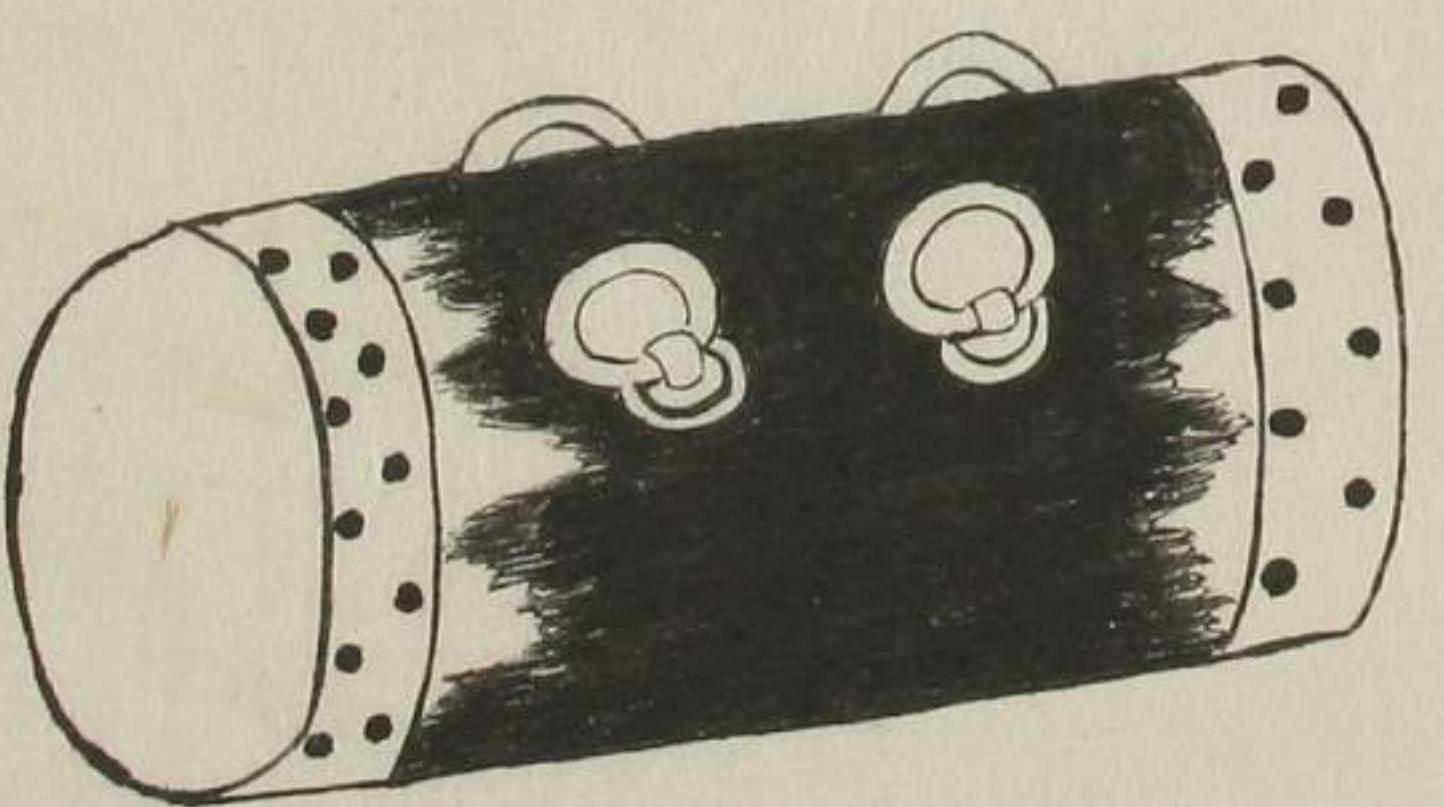
御太鼓橋^{アシハラ}一^{アシハラ}堂^{アシハラ}

大番頭^{アシハラ}十層^{アシハラ}中仕切^{アシハラ}門^{アシハラ}の写^{アシハラ}（アシハラ）二^{アシハラ}六^{アシハラ}時^{アシハラ}
の鼓^{アシハラ}と^{アシハラ}打^{アシハラ}かる忌^{アシハラ}月^{アシハラ}七^{アシハラ}夜^{アシハラ}の朝^{アシハラ}セ^{アシハラ}アシハラおぬ^{アシハラ}く^{アシハラ}ま^{アシハラ}

御七ニセ反ヤ、又アカ坊モ、瓦幣ヲヒ鼓ト至ル
古物ヤク元竹林寺の宝器有リ」と太閤が
承りる、」と、中、銘あり「和列生馬少竹
林寺僧堂の太鼓張大工近江守と號」并云
大師四句の文を研り、是ハ今竹林寺也

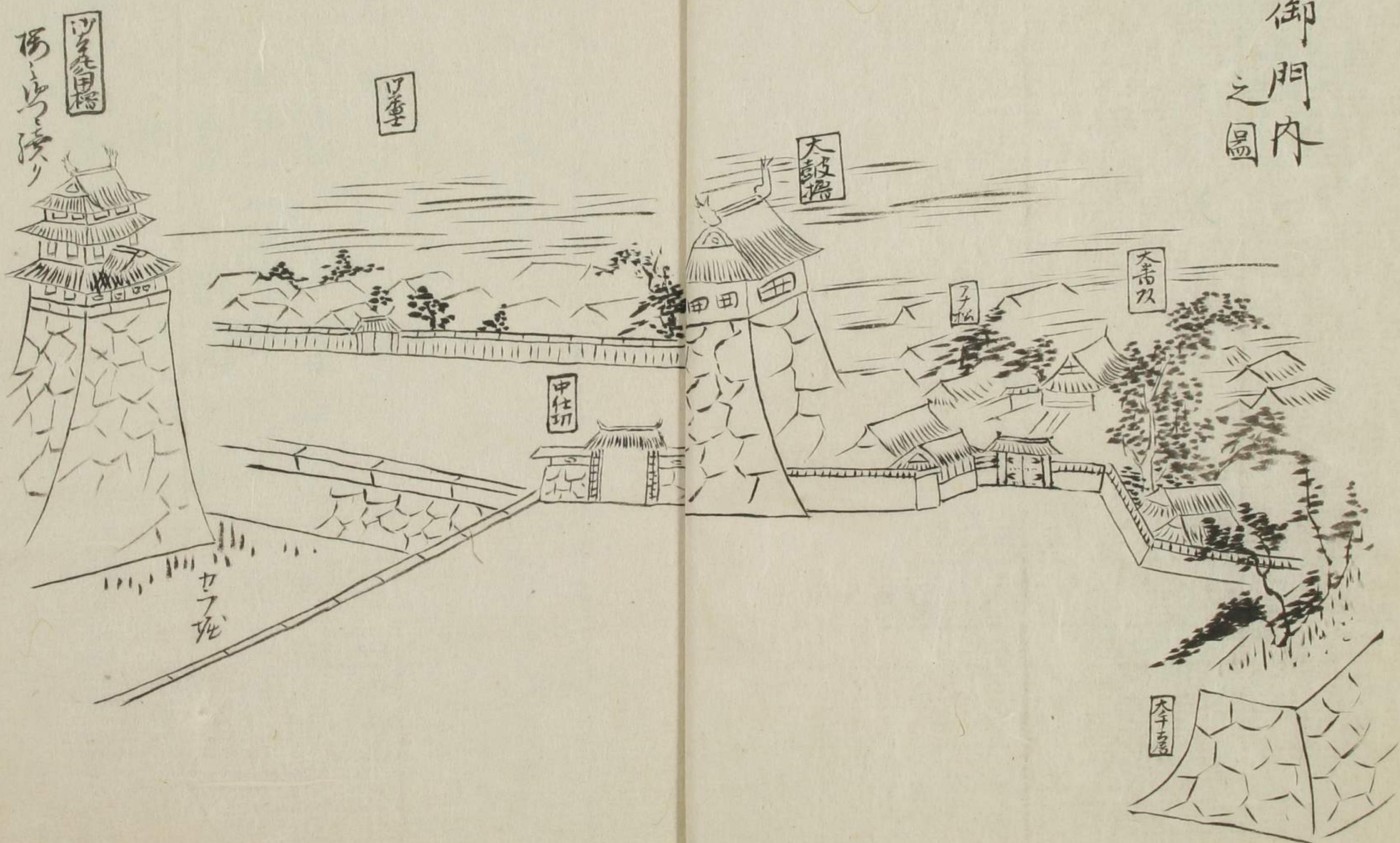
太鼓之圖

長サ三尺サシ度シ
二尺余胴黒漆金
物銅



下麻布桔

追手御門内
之圖



王造口 南向

左右櫓と構へ石之外形多々出陰の虎口に渾々け
透樹木生繁す やくみはせこ番屋四ヶ所即城番固
之内、東番頭の小屋ニ連て 副城番の小屋隣ノ太
鼓櫓中仕切入り石大番元たゞ 御本丸極の間直
通所至る外ハ枚山芦屋若江深江十三越ホの通
路あり是かたの方へ而ヒト 直田幸村の出丸有し
所にて是當城の櫓モリ

六本松

同所たゞの角十弓斗の弓門二つ有りノ常曲

輪の如くノ切の地有り 中古松六本有り首より
突き出る事も無し

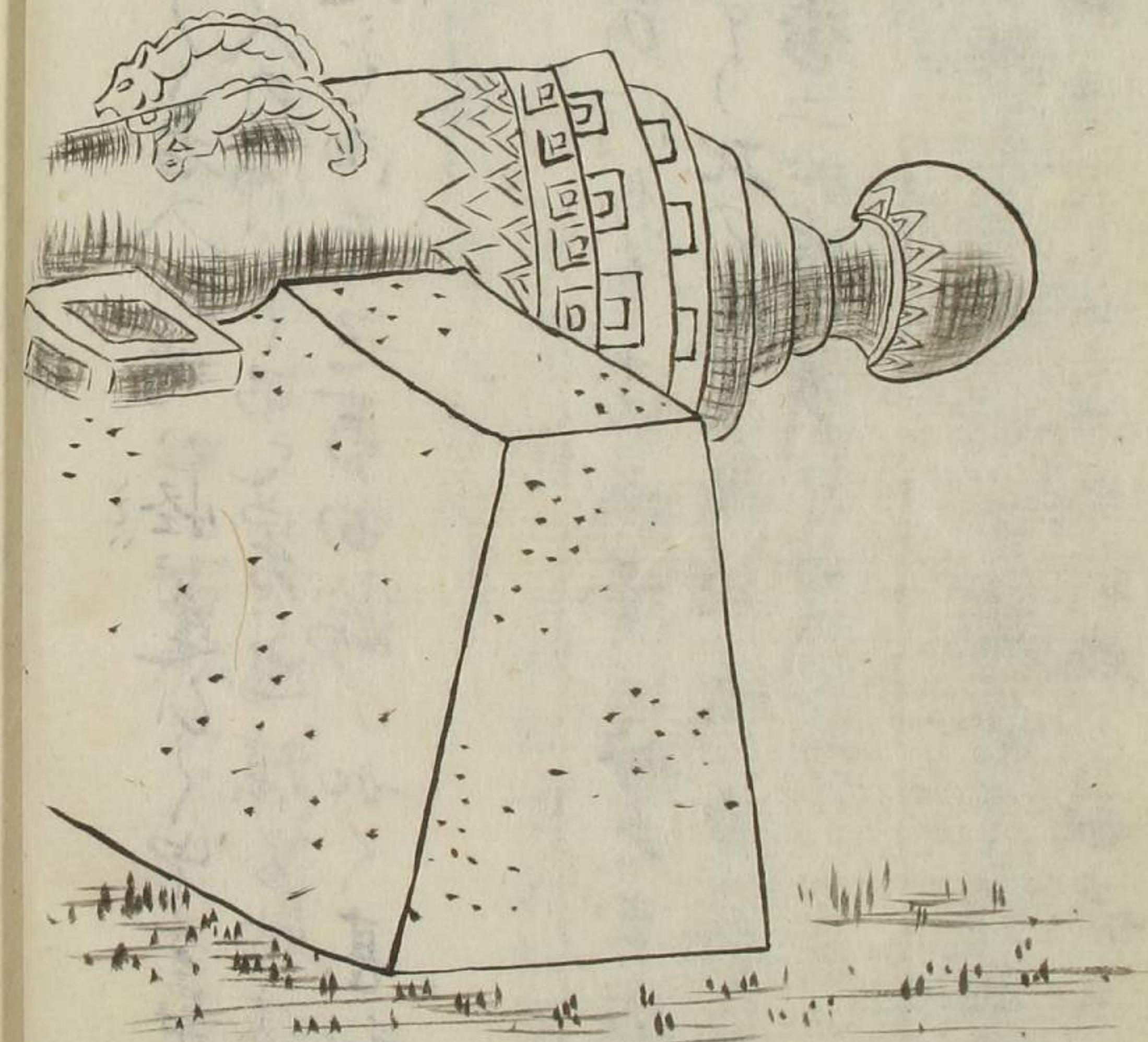
木坂

竹石一重の門あり 城番より之王造より左
連、是より北の方を既飽く ゆ本丸の物凄キ也
右ハ一加番ニ加番並ひも

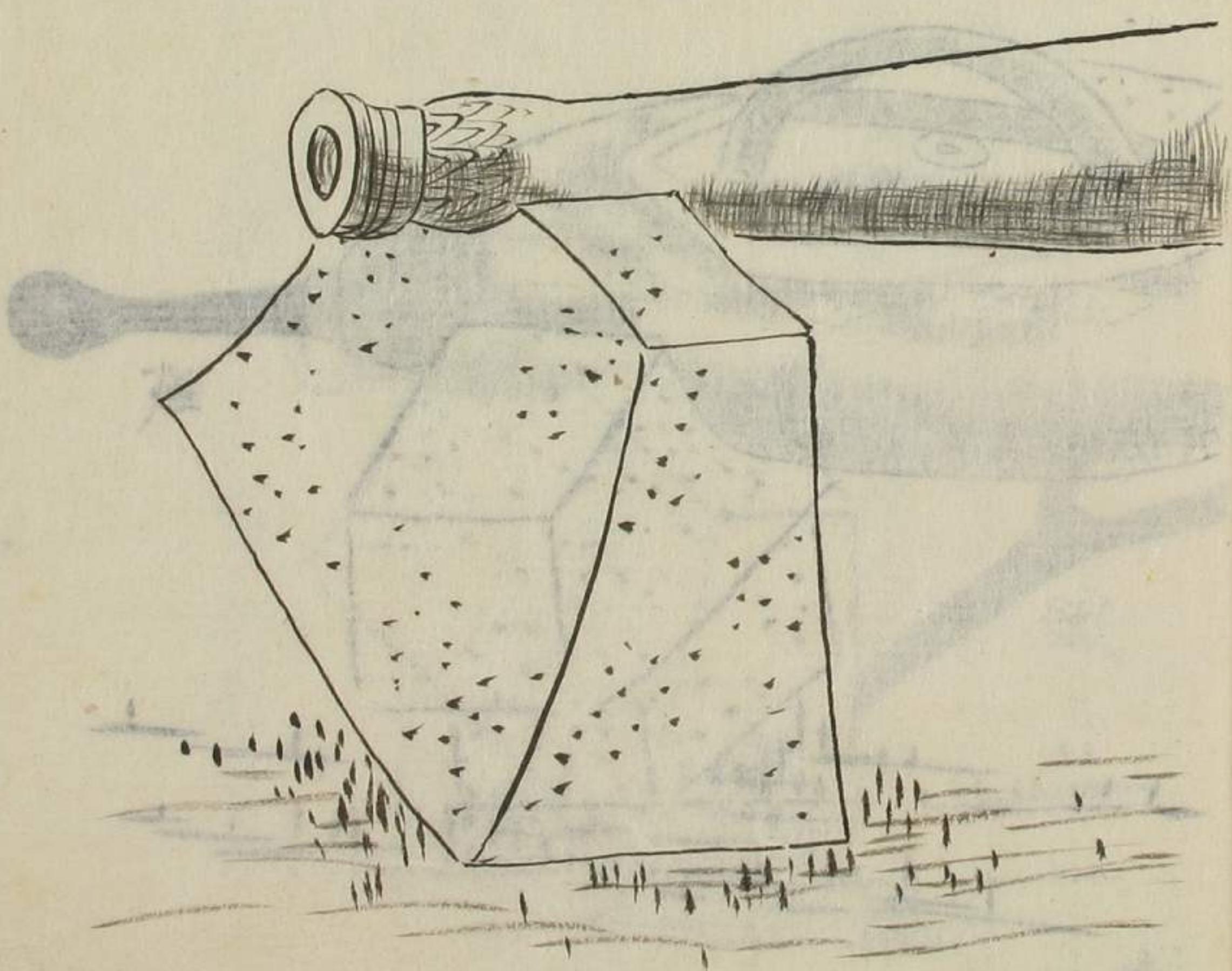
大筒

同所一加番小屋後隣の裏ニ有り 城中大筒
三十六の中才一の筒ニ太圓朝鮮人取寄シ

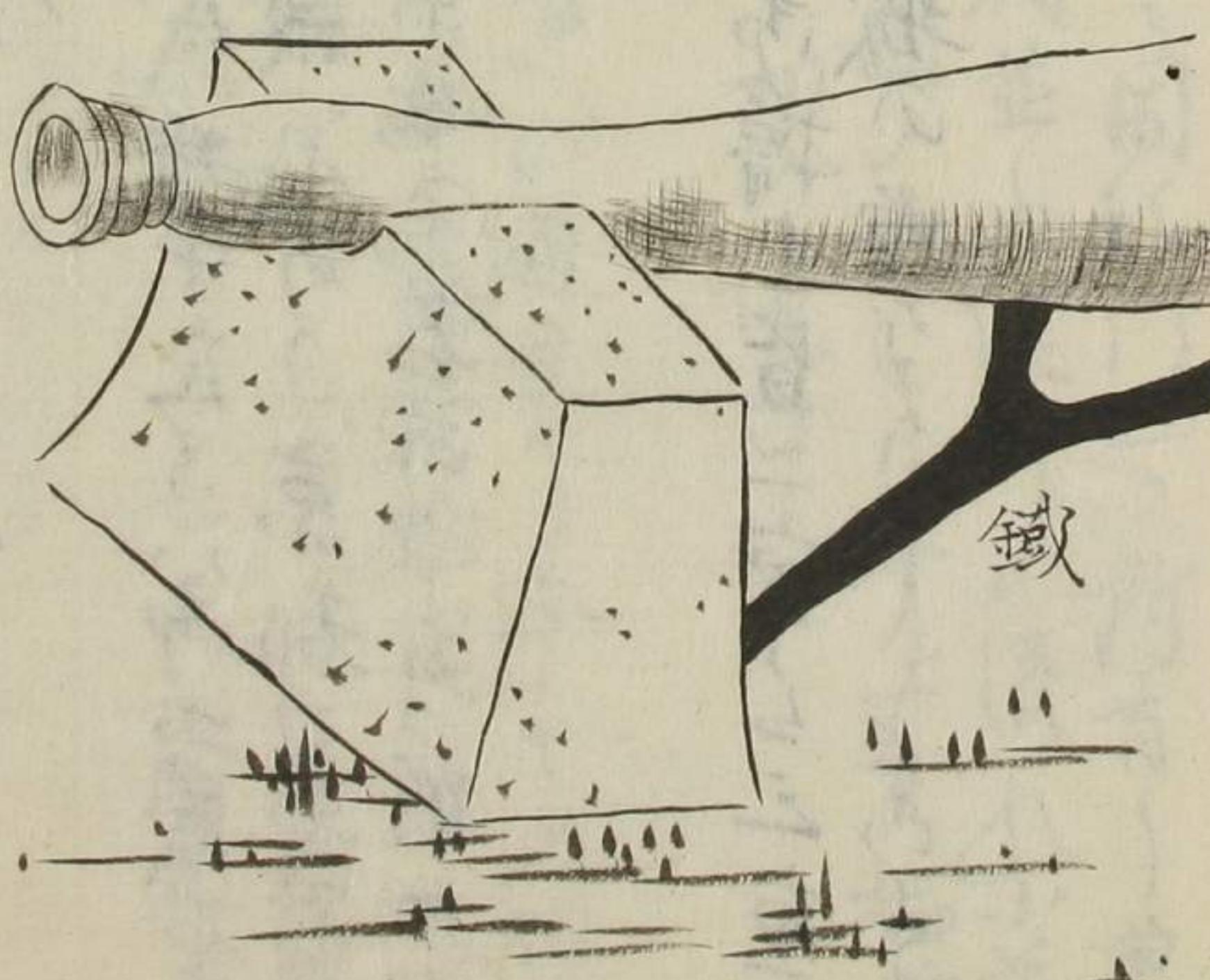
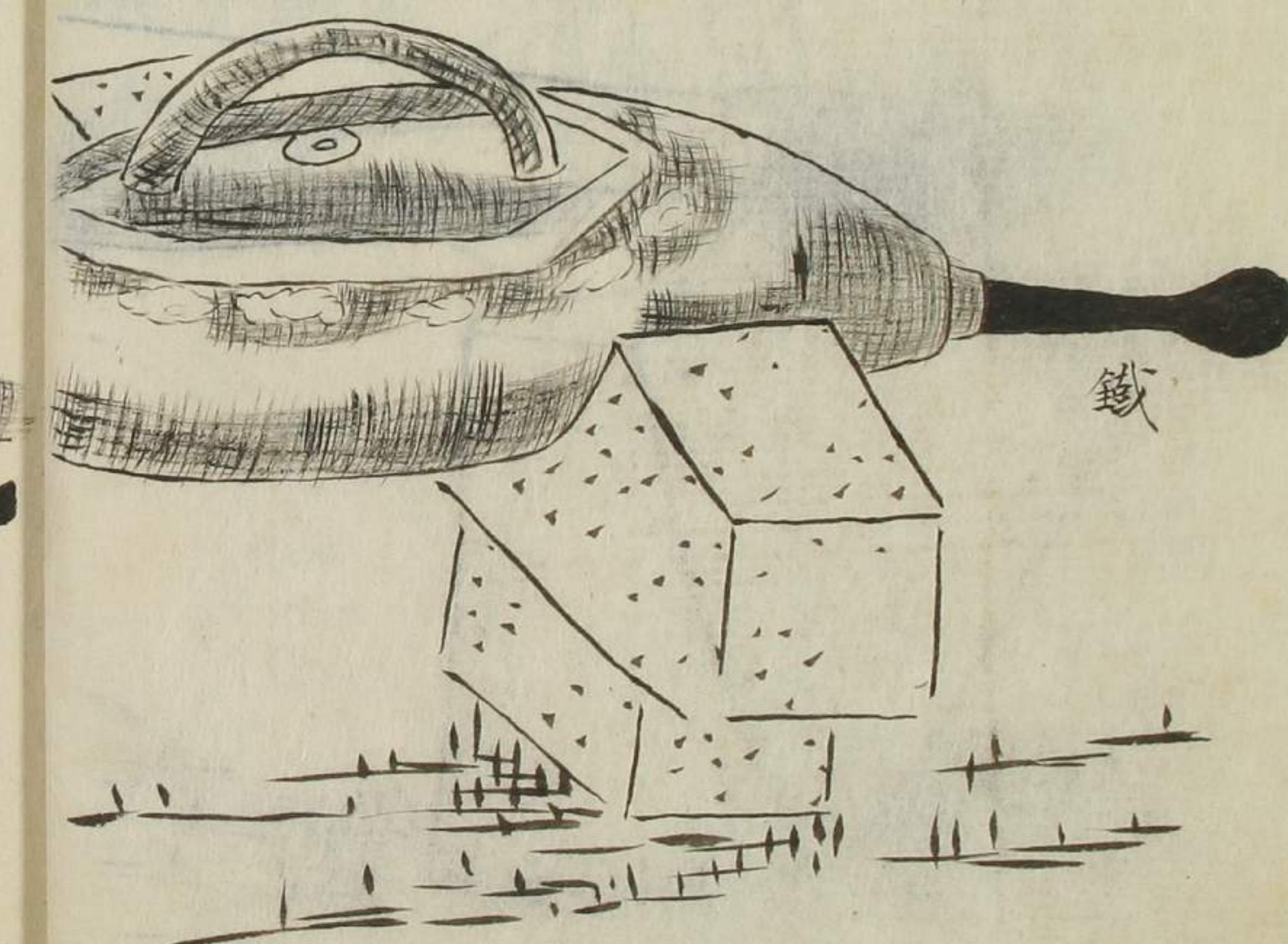
石火矢之圖



朝鮮筒長サ
元渡リ二尺口人
竹の矢金二
枝有り



朝鮮筒



長す六尺口五寸五分
唐金中藥器の筒
有)

中仕切 一重

卅邊百日而目付の小屋あり御本丸後より

京橋口 檜二重（五門あり）

北向こ番屋ニツヤ城代侍中たゞ、御蔵右衛門屋
三連、外も天満川流れあり京都多良牧方
西への街道こ傳り京橋の名あり舟形の内（
大石あり）

伏見櫓 三重

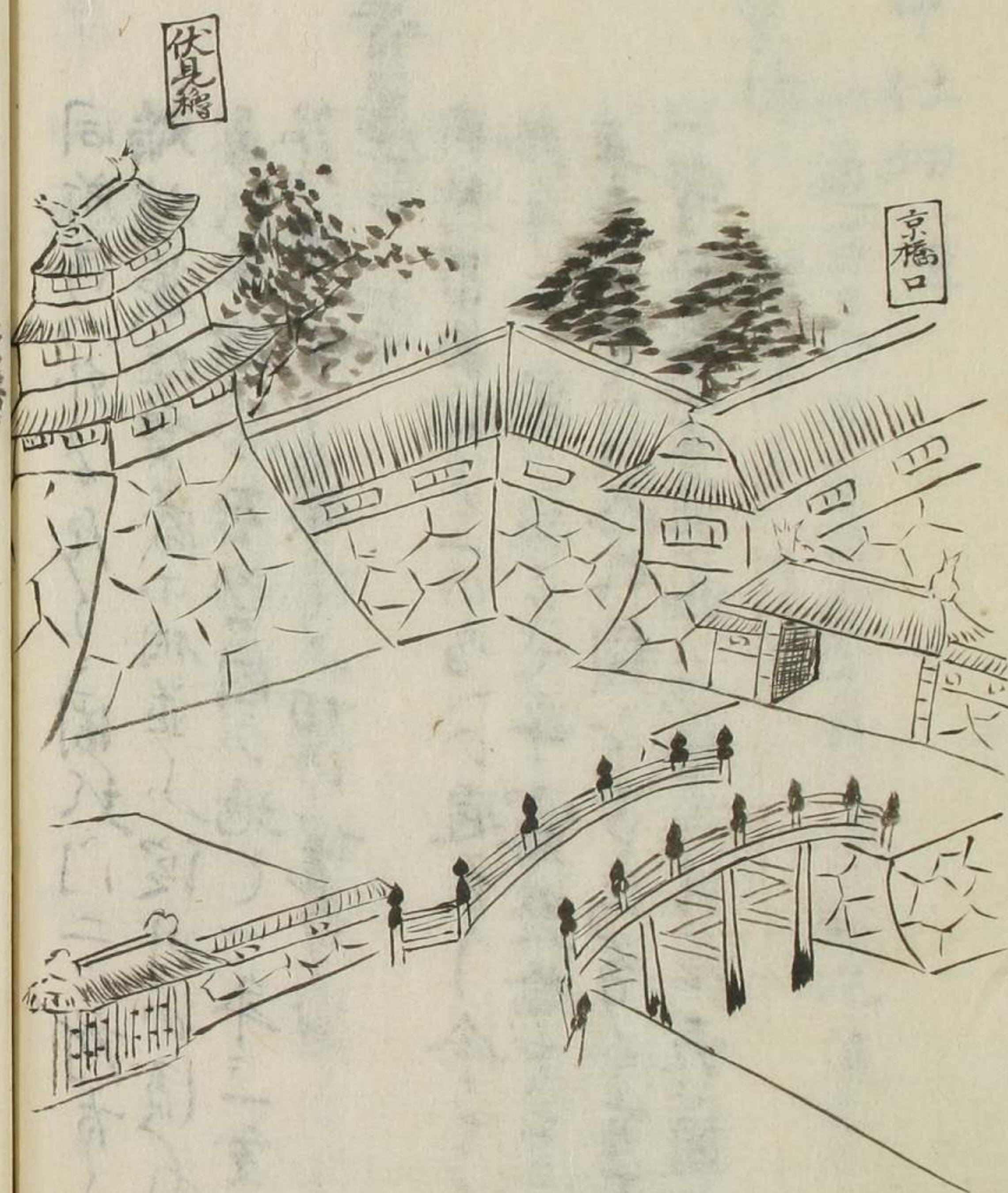
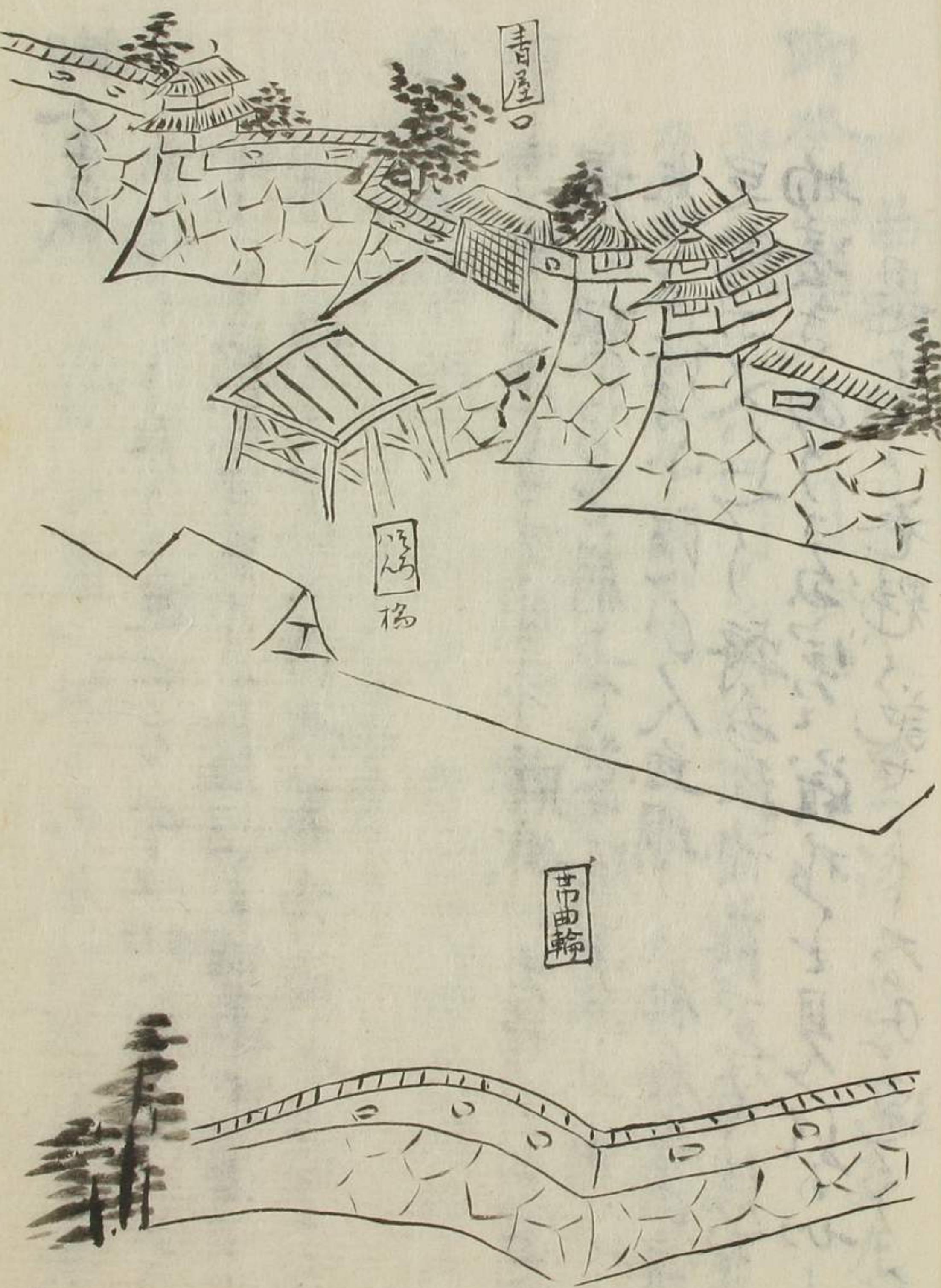
同所あり介曲輪而櫓を皆二重も三重あり
是のこ伏見而城の増うる（とらう）引
マタノトロ

帯曲輪

同所ゆつ外なるたゞ、周瓦門ニテ所有（曲輪内
燐硝蔵塩噌蔵木相並）淀川の流（小築）
每五曲輪（うち）瓦壁固の地（一年ニ文塗噌）
（筑替）あり常（メ）切の備（アリ）

青屋口 北向

同所帯曲輪（二の内）の通（アリ）今（メ）切ら通
路（アリ）窓（アリ）と十露盤橋や（ニ牧、童）
車（アリ）中（アリ）入れ鎖（アリ）つづり（有大野修理
一等の屋（アリ））（不（アリ）と云（アリ）た（アリ））



御金蔵

京橋より石を連せ中は切一重のあ是
ゆく石の方より丁木ぬるは邊近渾ら一坂
便に坂と上れん御金蔵市城代屋家

血天井

市城代屋家玄関腰壁の天井と云當城彦
所の板の間と刷上と高下の天井小用ひ（小
年と往々小隨い人血明）引手の説或
足頭ふ又（アシタマ）轉ひた説有（アリタマ）
物凌きあ（アハ）ニ害無（アハス）威形と見（アヒメ）セ
是より卷題記ヤ（アタシ）ト連（アタシ）ル

脚本丸櫻

御内 南向

市玄闇（アキハラ）の門太鼓槽中仕切を越（アシテ）
至（アリ）た右壳（アラカク）橋（アラカク）ノアラ（アラカク）
向番所（アラカク）刀（アラカク）形番所（アラカク）同心守（アラカク）

蛸石

同所并形の正面（アラカク）四間横六間蛸の形

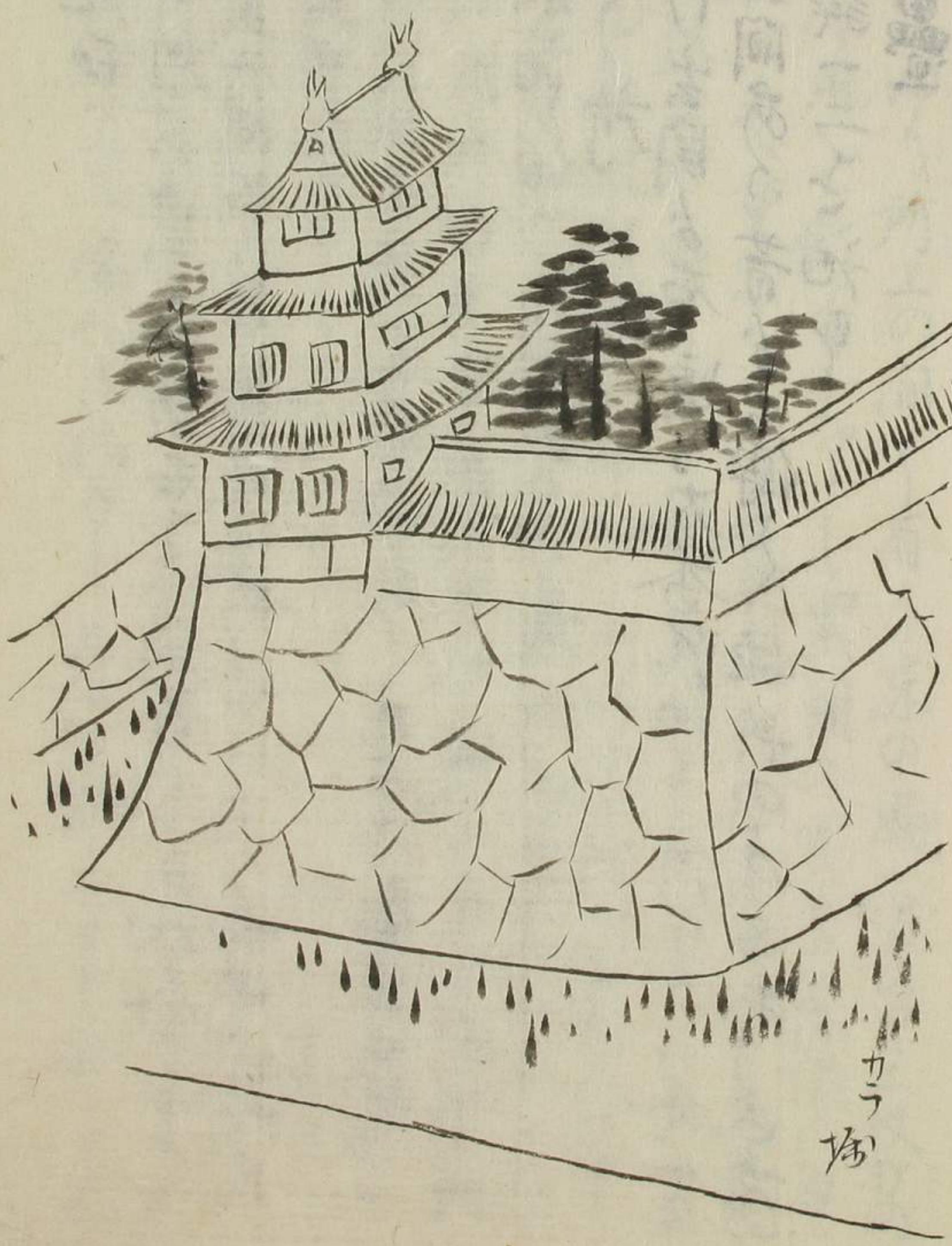
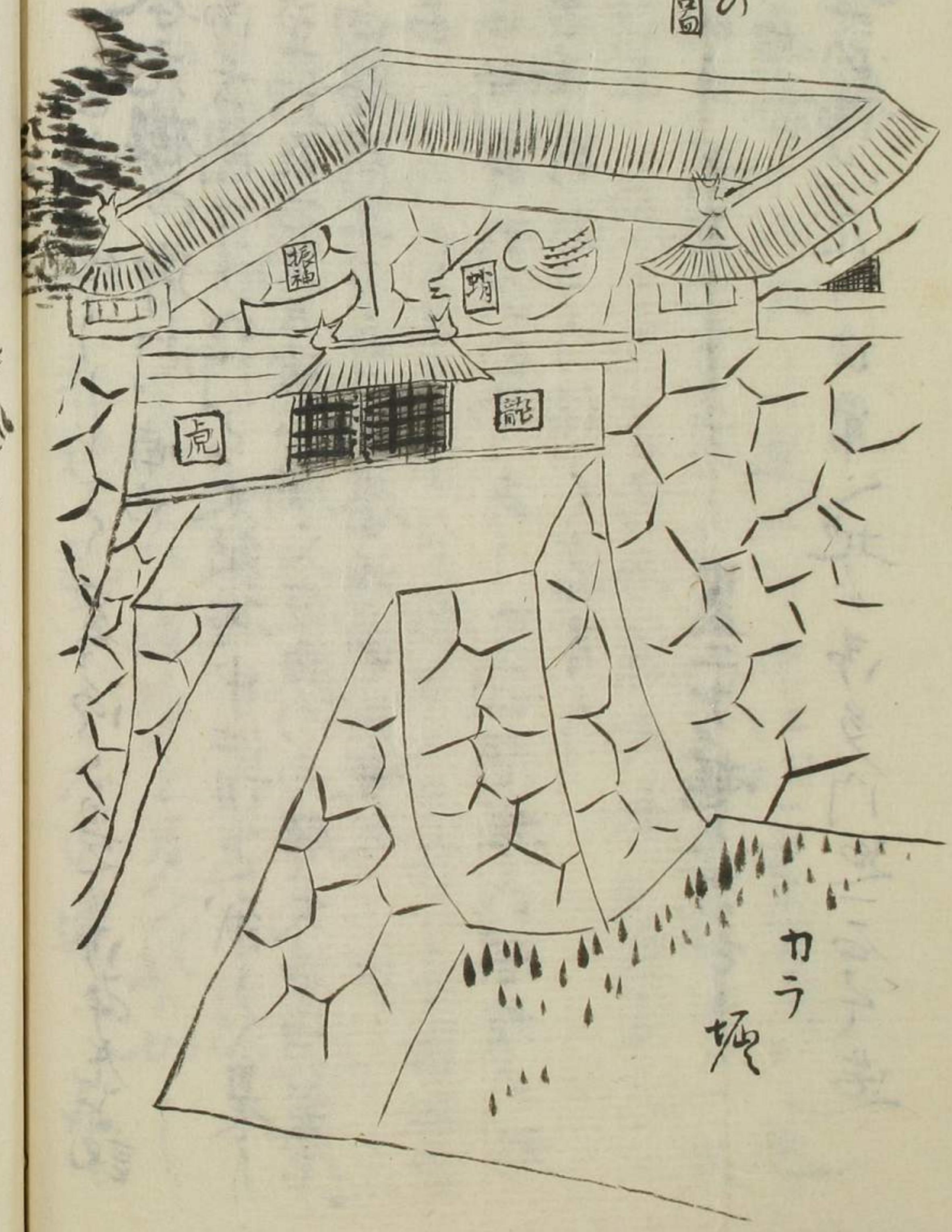
振袖石

同舟形丸の方（アラカク）三三（アラカク）横（アラカク）

角石

之の脚（アラカク）の角（アラカク）地（アラカク）多門造（アラカク）

櫻の
御門の
圖



龍虎石

同所のゆつたるの石と云ふ者より大石ゆく
墨二間横三官龍虎の形現れたり而中至く
益明る)

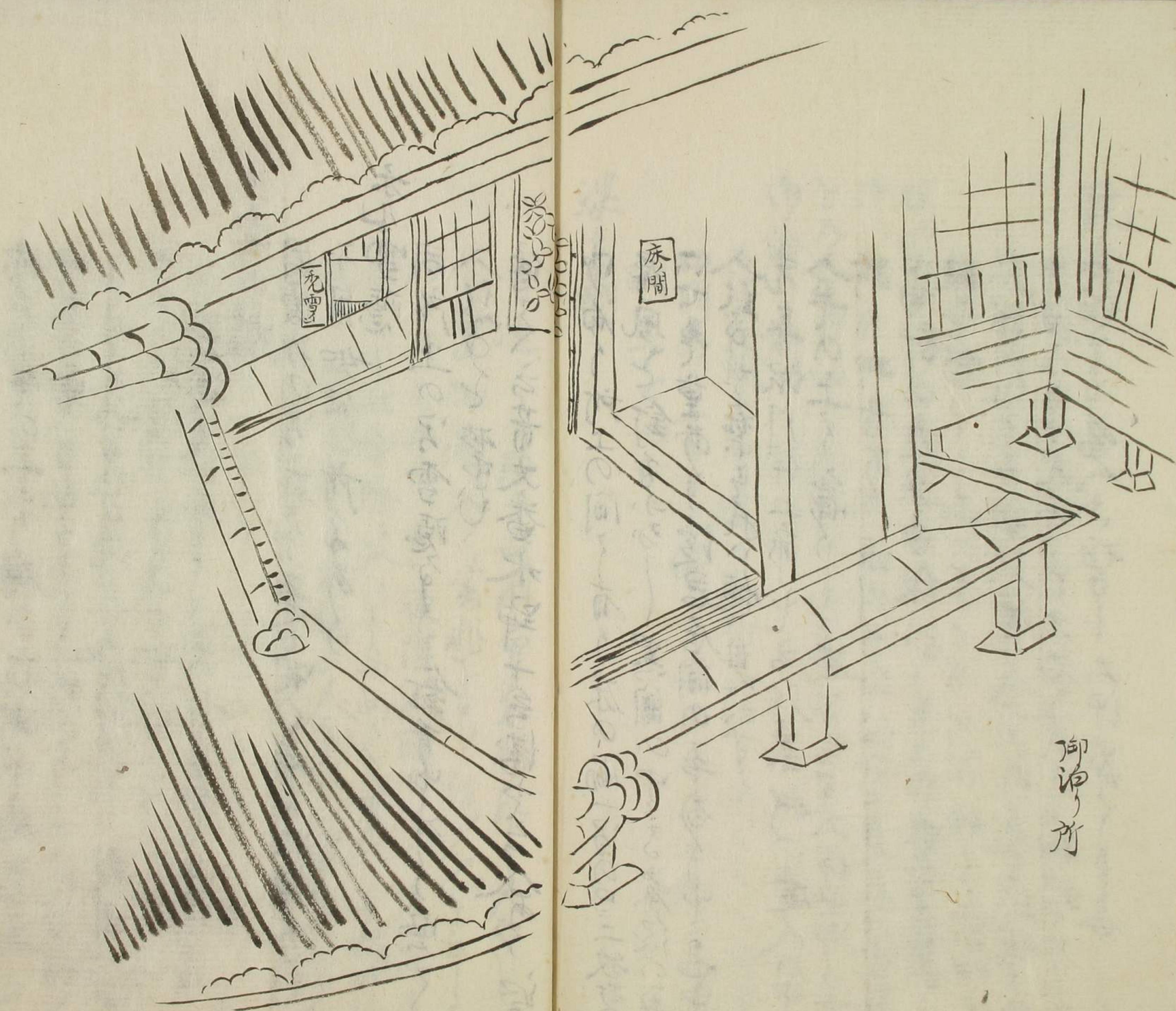
橋の西門内裏をゆき闇向砂した石ゆき地頭壁も
沙つニラありゆき寧ぬ間ニ水漏ニリ有り石の小門
と入、ゆ泊り所中の口ゆ臺所あり)

ゆ泊り所

ゆき園より右に連る大番邸ゆく所うづりをな
四間あり昔より傳く恆異のすきあう古文の
譜一二と記也

婆々墨

ゆ泊り所上の間子有り床の脇一間の口三枚柱の
屏風と釘子つか一黒闇の中する簾縁の事
六七キ重あり淀君居間の事ありやう中
入なりを禁され候て見へず
先年沢川岸立席立ち奉候の達人曰中
入室の上り廊りニ夜半にて岸立席立奉
跨り押者あり沢川覺えて之と是れ年のに
七旬計の老婆白銀三十キサヒと振る
眼と怒りこのふと沢川の胸に當押す
が沢川を声ゆく達人うれしき事返さん
やうとすゑと大石といふ押持ゆく
やねとも多くおぼへておけゆくと合ひ



ゆくとそのより轉ひ底漸せ迺ぬ是とし
血まみれ、はるかにうらやむことなくお悔悟セ
リ。やうやまらぬくへ死有り。新國の食
物うなれ怪しき事のしすのつゝく
石を入の事。されば、言ひぬ

不闇の爐

同處次の写有り是も寒く時々必恒有り
不用如能の所ああ

充雪隱

同所上の写雪隱。釘をやうやく堅く
入るのと要ひし
傳ふう昔大番水野十吉はや三人あつ室

勇達くの頭中はれ更衣勝れ人あり
其番の而是へて害根とよき御さんと云ふと
人へゆく牛。お夜深人鎭り。後只一人
起きて竹雪隱に入り。かやく見れ。半襦のみ
着け。先有り。大股の入る。わゆる事
五戸同くひととぼじ。よ。先あく。瓦や。や
燭持をうへて。拂ひ。隣子のきよく。手
水跡座をふい。振り。見れ。半襦
や。充忽。史家の大充ゆす。あの眼を
見て。こくや。むち。地を。敵の人。すが
み。一。りふ。て。場を。消す。もう。流石
す。ま。博。す。や。入。咸。一。四。聖。年。四。
と

蒙りしを知りて有りし人ありしやうと思ひ
時極り口元酒とく陰火の端と正一を見
三百年経ても傍よりまことに血あれ
さるの代より折の怪異有りと断り有り
是より沙門をつれて山荘所すより石くら
社有り

御臺所向の御橋太閤や所持の御道也
小野道風の頃圖有芦屋の金日
御番爐うばんろ燒獅子
御湯桶黒雲川改御力武

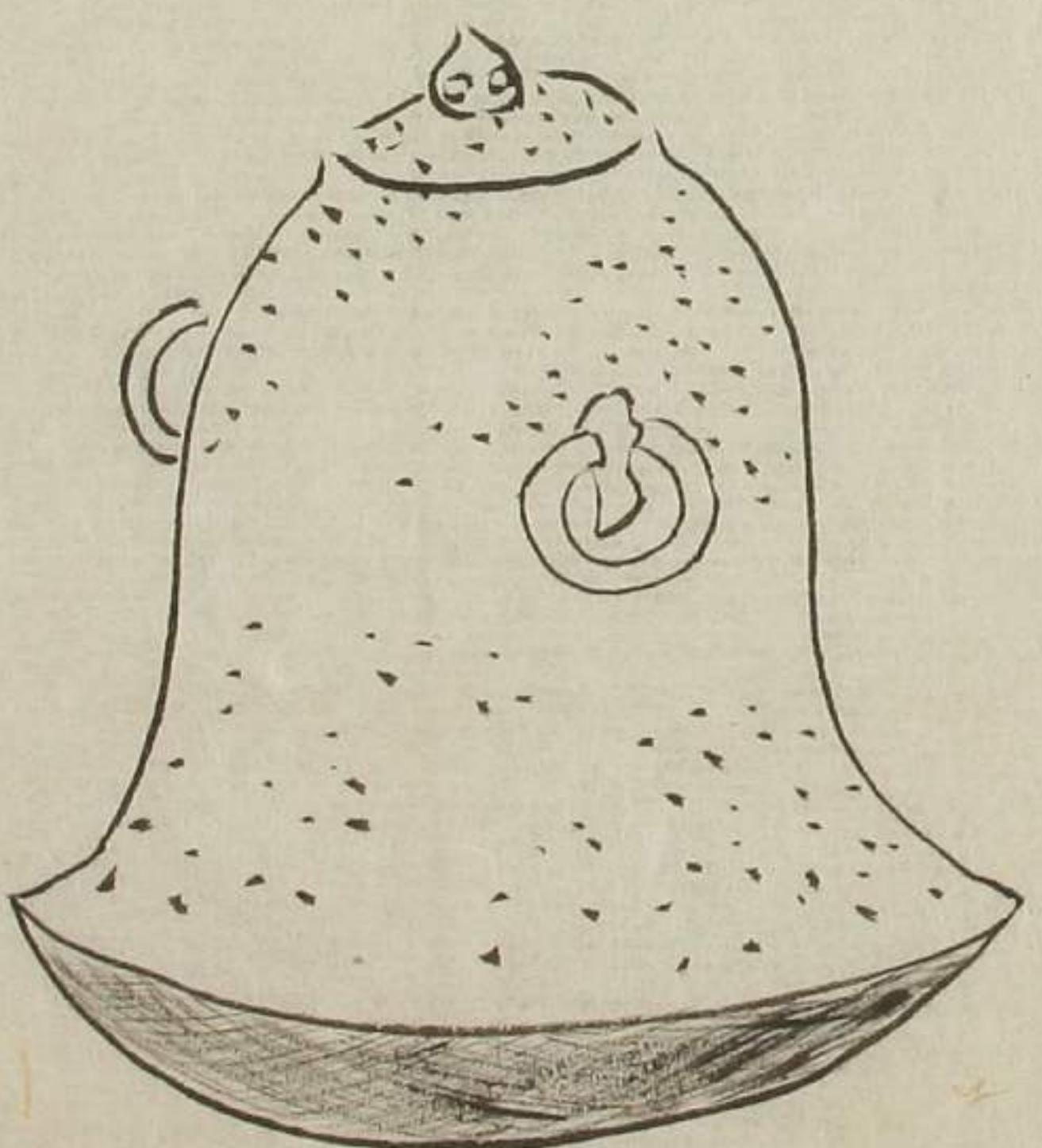
稻荷の社

當城の守古木盤中有石の鳥居并

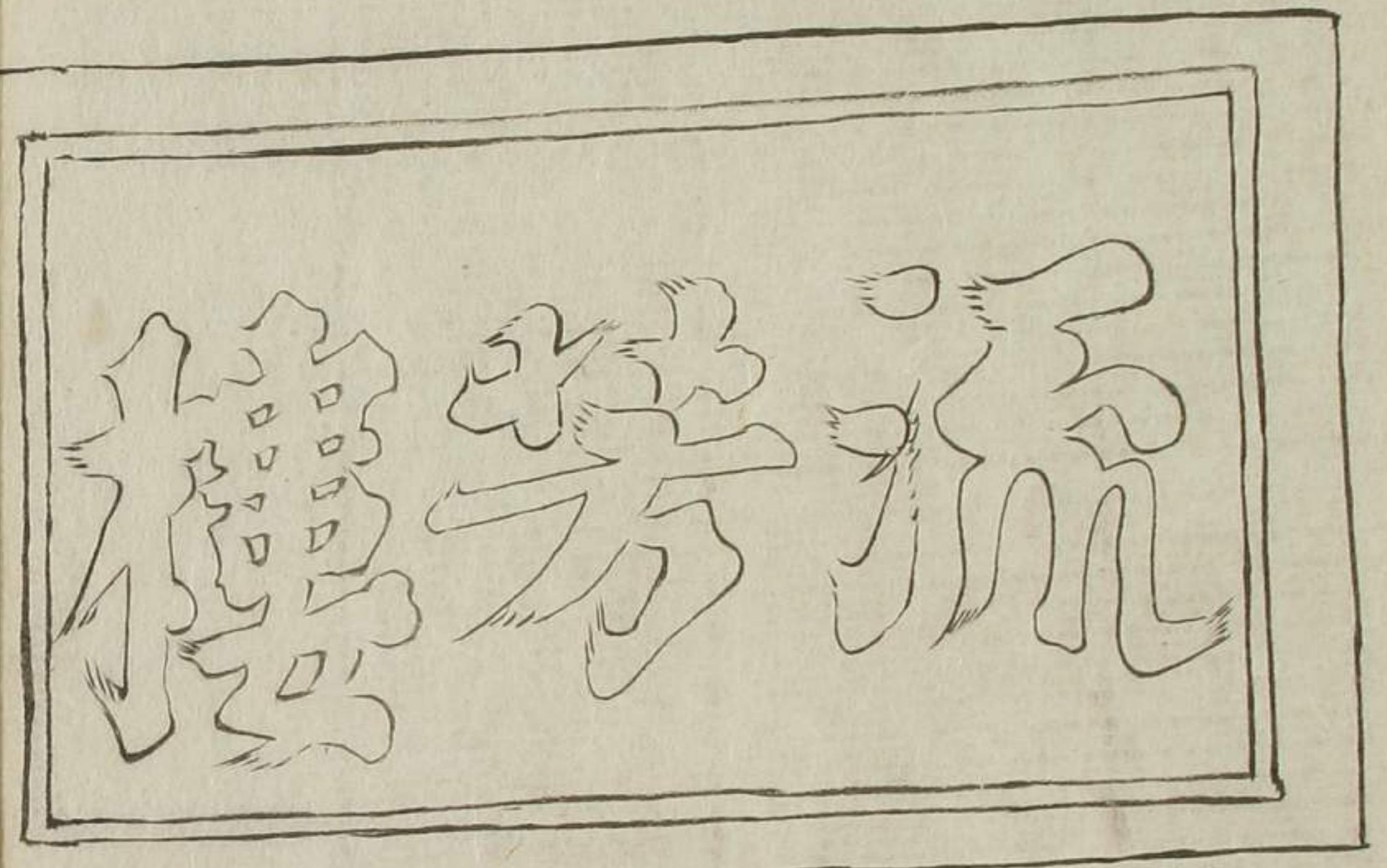
手水鉢木多一洋殿本社近年の造営せ見
多て前も廣キ原少々大番荒大的の警古有化
邊えんノ裏相の紋有りおれ事有り并玉矢根モ
拾い骨つきる人有り

芦屋之釜

世云芦屋形ト



太閣御教奇屋之顧書之風道野小



緑及本地唐木
文字一段高リ
付物ナリ
横三尺余一
堅一尺八寸余
双分經是縞入

袈裟衣掛松

同所稻荷の後小あり蓮如上人袈裟衣と掛り
松や云傳シテ一根小立本の弊と生繁翁シテ

補樽

同所右の方小有リ太閣の御代狼用の猪トガと
廬リやそこ三重リ城中才一の高美
倉リ三重目小淀リ生害有リ猪トガと
柱リ窓リみの赤血リ漆リ猪トガ
文化甲子年リ薦請有リ小福リの下リ黒
塙リと仰リおもて是翁の予歎リ全リ形リの傍リ
と有リあくリ五リとすれリ次中リれいリ歎リ微リ香リ燒リ

笠
笠
橋

同所なり小連の角の矢倉、諸井住本も其形
小前り主に櫓の形姜なり、而して名也す

人面石

は外の石垣の中、赤や、色々人の面小似る
石あり是より觸る時忽ち古魏と覺る
良繩之功と聞きてゆうや安あらふ毒石也

山里門

同所たゞの方ニ連る御幸丸裏虎口より
御つ二重山内三曲淵ノ三加番是居候
至る浦ノヨリ西向ニ二の丸への口と
テモ京橋口より通じ

中仕切済

伊天守屋の下にあ
る刀同心之と守

帶曲輪

同所即つゝかす右連中門あゆみ城
や城大香のれ入るふと繁じてく中の取
きくくくくくくくくくくくくくくくくく
曲海也もよ

御教書屋の御

たうの言ふ布若破下是中住ひる部千ノ
利休の好む國ひと造りきふ所も植せし
あゆみ也雅やく西多くゆ國いわ

今一心寺小有^{アリ}而庭セモ既すゆ左右一

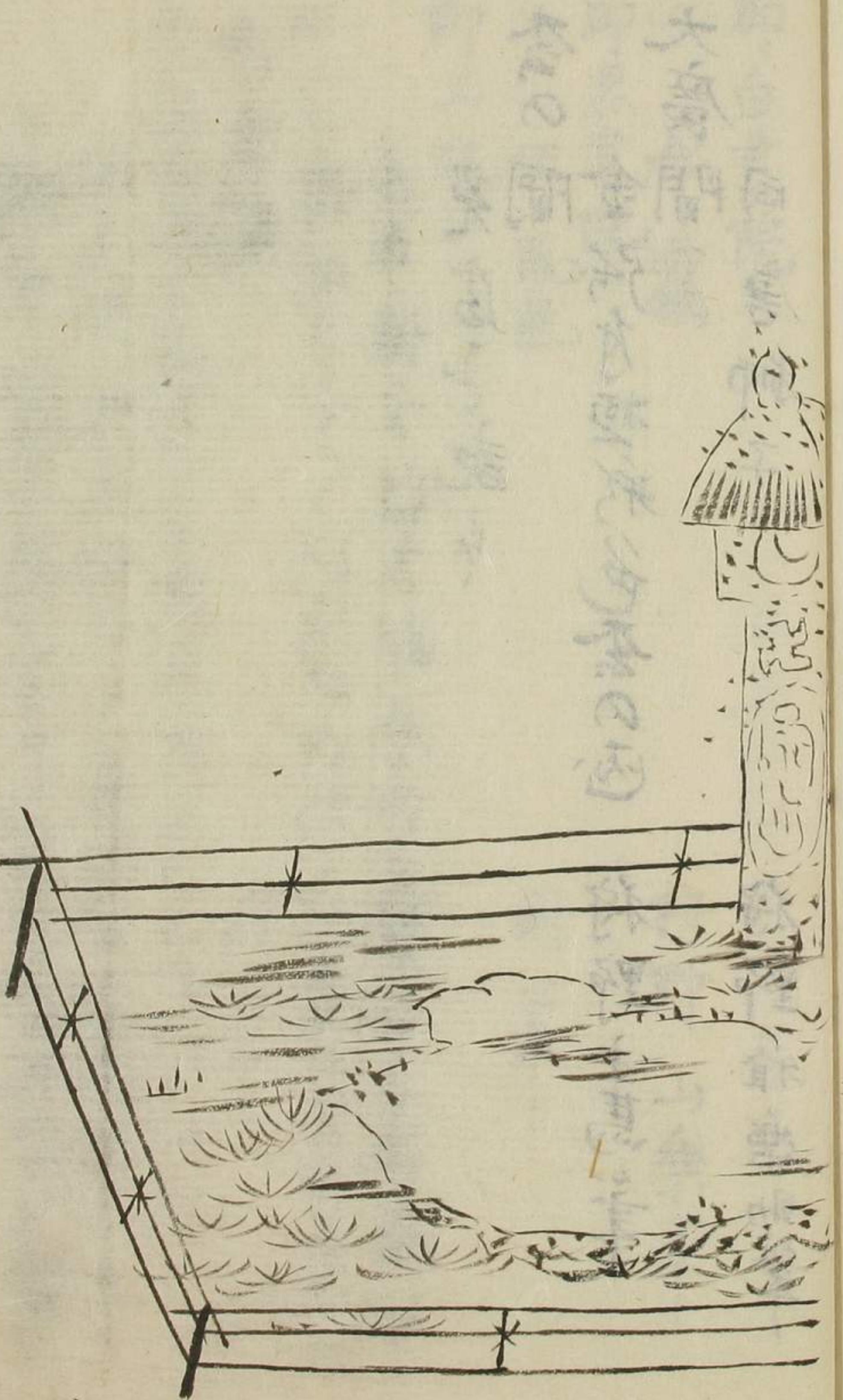
地蔵形の燈籠^{カマクラ}也因^{アリ}。

正面か地蔵の形と即^シり裏向有^リ利休の書

岩松元心風来吟
立石大龜^{タツシ}の臺^テ立^ス造^ル立^ス也^ハ鉢

地蔵形燈籠之圖

子別休母



花石相並木地の下にそつて大石一塊
鑄今一塊とは是と云く石火矢三挺あ居仕威り
有り外、大至而ひく甚大車場ある丈
五居と廻りく御玄関たるの小門、わふ

御玄關

諸國きづく江府のゆ形と石壺のる御玄院面
右あはすね方部屋御臺あるゆ座して
見度と記り

李の間

金張有極彩色空の函

狩野主馬筆

大廣間

同 唐獅子

狩野雅樂助筆

御白書院

松ニ露鑄

御黒書院

相ニ鳳凰

御上院

鷹の画

同 署

山水

秀頬ふゆ居同御上院

梅ニ鶯

セニ呼寧ヤエハ是ニ狩野雅樂助筆

ゆ帳臺襖蜀江の綿布引手銀文丹一名画有

尺四方絆の画を並べぬがウ天井うり雅樂助

友李 山樂 探出永徳雪林中の名画筆力と
至し中時代不尚画有り故を知るに於て尋
御廊下の長押ニ 御六代將軍の所画有り
草画の鷄ニ羽あり其善麗筆ニありて

淀の方御居間

ゆ上殿極小山鳥

山樂筆

物す御絵有り油の色彩色あ幸也

諸様うん方が

三ツ

ゆ奥庭ニあり是より天守臺迄坂塀有

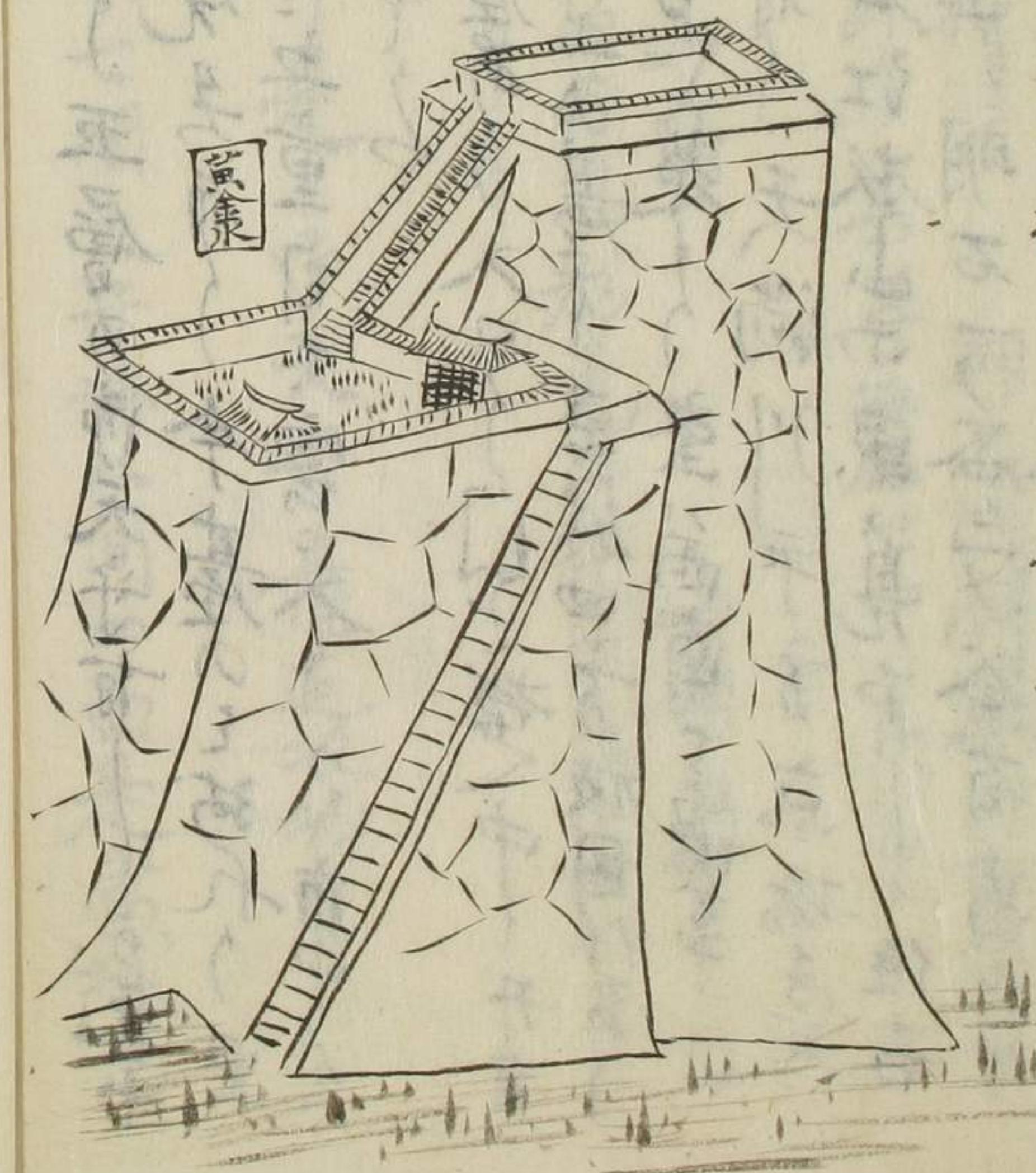
御天守臺

高サ者七間式十七間天守亦八間四面是壇城也

中心より上より五層の御天守有リ一ノ先年
雷火、がく、焼失有リ今基のみあれ、里
老の從小常ニ立重目も雲に入りく市中久
見テ、

才三版御き臺あり入口より門を構へ中より升有
坂を右にされば上の臺を至れ四方坂田もあり
丸毛り幅三丈、こ是より望ひ西南を浪華の
市中、草屋小布、天満川平方京橋通此
當り芦屋若江松山本東、見下、住吉
堺渡頭、須广明石二ノ谷テ谷有馬六甲
同モ不及波の梁王の黄金臺魏王の銅雀
臺とは是十石過、一也思ひれまゝの

御天守臺の圖



黄金臺の井

而天守臺中段のゆき内に有る名水を常
扱事と禁む六月十五日宿く諸人内
其冷すたま水冰のゆく是富城ニ丹のこ
金の銀の下馬の井山に高丘下に井中蓋金
名あすと不思仰之太岡殿下に井中蓋金
と沉めりや云伊シ先年挽助とちん
賊大番の臣をすりく室に入ひ氣る水練の
貴あれけ井の底深く尋入り中
底鉢とい格子を造りあく底ふ入奉不
叶止りやうや其後歩金蔵の屋底と也
時掘れ置けられ前此御被と奉西院

御製衣あり 高津の宮の背恩を難波
の湯く見く波く翻ひうき望景か

やうやくあらふあう。有と石りん

侘助椿

定のうちに旅の写の庭あり 朝鮮より持

来りしる至る大椿

雑波の梅

同所より高津の宮より家の方へと存

片葉の蘆

楓ゆつの前壳堤ふちり本より毛毛りて

片葉る

攝而モ御殿の右所ニシテ城石垣之大石多し
城基の節諸處ヨリ獻上の石あり一丈見一大

石ニモ必家との紋所ヲ鑄シテシ禮教三捨ニ

御門十五箇所其外供大さり年々一筆

金城聞見録 終

環翠堂藏

印

金匱要略

卷之三

諸門上品氣血中行大氣而生子子一經

八十九